文京区の人と地域をつなぐ情報誌

第三号

文京人

文京区立湯島小学校

文京人インタビュー

文京ローボノ支援隊代表
渡辺紘崇（わたなべひろたか）さんに聴く

クリエイティブな生き方でボランティア

――大震災がきっかけでボランティア活動を？

公益社団法人日本広告制作協会（※以下ＯＡＣと称する）で理事をしていた時に、東日本大震災が発生しました。銀座1丁目に事務所がありましたが、すごい揺れで、慌てて階段を駆け下りました。ビルからは窓ガラスが落ちて……。

そんな体験をした後、ＯＡＣの仲間に岩手県大槌町に知り合いがいることから、被災地支援の話が出たのです。我々クリエーターとして、何か癒しのボランティアができないかと、未来に向けた楽しいことを企画しようと来年のカレンダー作製を提案し、理事会一致で決定したのです。

ＯＡＣ会員に声をかけたところ、たくさんの応募がありました。色々な分野の会員の協力も得て、その中から12枚の心が癒されるデザインを選び、ほとんどお金をかけずに数万部作ることができました。そして、三越で展示会を開いて販売し、併せて寄付金を募りました。それを売上金と共に大槌町の町長さんに送りましたら、本当に感激して喜んでくれて。

それがきっかけで大槌町の小学校とＯＡＣで、生徒のイラストをプロがアレンジしてカレンダーを作る企画が生まれたのです。東京や大槌町で展覧会をして支援を求め、大槌町にバックする、子どもたちを巻き込んだアプローチです。皆さん毎年楽しみに待ってくれるようになり、それが今日までも続いています。

子どもワークショップ

そういった活動を通して、ボランティアは面白いなと思いましたね。色々な人との交流があって、視野が広がったのですから。

――そこからどのように現在の活動に繋がっていったのでしょうか？

震災ボランティアをきっかけに、我々ＯＡＣは公益社団法人としてこのようなサスティナブルな社会貢献をしなければいけないと思いました。

それで最初はＯＡＣの中に「ローボノ支援隊」を設置したのですが、公益社団法人の中で別の団体活動はやってはいけないと内閣府からの勧告があり頓挫しました。そこで私が退任後の２０１８年に、その時の精神を受け継いで仲間と共に立ち上げました。

プロボノという言葉はご存知ですか？「プロボノ」とは、「公共善のために」というラテン語でして、プロフェッショナルな経験や専門知識を活かしたボランティア活動を意味します。

「ローボノ」は造語。ローはローギアの「ロー」であり、速度は遅いが回転率が増大されるので、登坂力や牽引力は大きいを意味して名付けました。老人の「ロー」ではないんですよ。（笑）

――活動は具体的にどんなことをされていますか？

広告・デザイン業界に携わったシニアのメンバーが、自身のスキルや知識を主に子どもたちや世のために提供するボランティア活動をしています。人と人との融和や地域活性化に貢献することなどが活動の目的です。

子どもたちのポスター展やものづくり教室、ミニ紙芝居や自分のマークをデザインするワークショップを開催したり、地方自治体の広報戦略講座など町おこし

「フミコム」自分のマークを作ろう！展

から地方創生まで幅広く活動しています。

―会のメンバーはどういった方ですか？

現在のメンバーは11名。発起人の創設者7名以外は、文京区社会福祉協議会が運営しているフミコム（地域連携ステーション）に団体登録した時の地域のメンバーです。入会、退会も自由。会費も無料です。やる気がある人だけが協力してくれるシステムです。

―「文京ローボノ支援隊」設立の前にも文京区でボランティアをされていたとか。

文京区に越してきて、個人として何かできないかと、様々なボランティアに参加してみたのです。まず、文京スポーツボランティアに手を挙げました。色々なスポーツイベントをお手伝いする活動です。ボッチャの指導員にも選ばれてずっとやっていました。どんなボランティアができるか、身をもって体験してみたのです。

その後、ものづくりを通して子どもたちの豊かな心を育むこと、創造性の発達を促すことに活かせれば素晴らしいと思って、デザインを子どもたちと一緒にという方向に舵をきったのです。クリエイティブな活動の良さを学んでもらうことができれば、明日の日本にいい人材が育っていくと考えたからです。

文京オリパラでのボランティア活動

Profile

渡辺紘崇さん｜ 1942 年東京生まれ。

大学卒業後、大手広告代理店を経て1976 年に独立。クリエイティブディレクターとして企業の広告制作に携わる。公益社団法人日本広告制作協会在任中、東日本大震災を経験し、大槌町復興プロジェクトを指揮。それをきっかけに個人事務所を運営する傍ら2018 年に「文京ローボノ支援隊」を設立。2002年より文京区在住。
趣味は40年続けている水泳（マスターズ）と読書。

イラストを使った開催ポスター

―これから地域活動を始めようとする方にメッセージをお願いします

ボランティアは一過性のものではなく、自分の特技を無償で提供していく中で、地域で生活する人々全体にコミュニケーションとして廻っていくものと考えています。

私自身は「毎日がクリエイティブな生き方を続ける」という自らの理想が自然とそこに繋がりました。ボランティアは得られるものが多いのですよね。歳をとると非常に貴重な時間だとわかってきます。

区内でボランティア活動をお考えでしたら、機会はたくさんありますよ。区報やパンフレット、SNSなどに目を通せば情報を得られます。

我々の活動が『文京人』に載ることで、またメンバーが来てくれるかなぁと。50歳以上のシニアが見てくれて、我々より若手が来てくれると、願ったり叶ったりで期待しています。

渡辺紘崇さん（後列中央）と「文京人」編集部

千駄木発～文京わがまち
小さな書店のワンダーランド

往来堂書店
笈入建志さんに聴く
おいりけんじ

本を面白がることから
はじめよう！

不忍通り沿いにある往来堂書店の店長、笈入建志さんのユニークな取り組みが新たな読者ニーズを生みだしている。

学生時代から本好きだった彼は大型書店に就職し、そこで修行を積んだ。そして、次に選んだのが文京区の千駄木駅前にある小さな往来堂書店の店長のポストだった。大型書店の取り組みでは顧客一人ひとりの顔を見て喜んでもらうのには限界がある、と感じていた矢先のチャンスだったという。

小規模書店のメリットを生かすことを念頭に、まず店内のレイアウトを考えることから改良に着手。新しい企画を次々に立案し、スタッフや近隣店舗の協力も得ることで、販促ツールを実現していった。

店頭の赤い看板に貼られているのは
地域で開催される催し物などの告知

近辺の書店や飲食店などを紹介する不忍ブックストリートマップ

店舗の入口を入ってすぐ右手の棚の
上部には「谷根千」の広報誌

成功するかどうかより、お客様の喜ぶ顔が見たい、そんな笈入さんの熱い思いに突き動かされた人々の後押しによって来店者も増えた。今では地域密着型の情報発信基地として、交流の場としても欠かせない存在になっている。

笈入さんの取り組みは独自性を放つ。「不忍ブックストリート」という、本にフォーカスした地元の地図づくり、往来堂新聞の発行など。ブックフェア「D坂文庫」も人気があり、多くの人が楽しみにしている。年に2回の古本市も大盛況

書棚の脇に貼られているD坂文庫のポスター

D坂文庫にはうぐいす色の帯が巻かれている

のようだ。

特に際立つのは「文脈コーナー」を設置していること。高額な本や専門書でも、小規模書店では需要がないだろうという先入観にとらわれない。「これはぜひお客さんに見てもらいたい」という力のある本は置く。その本を中心に内容的なつながりがある少し手軽な本を、ジャンルにこだわらず連想するように隣に並べ、自然と興味を持ってもらえるよう工夫をするそうだ。

最近は高額にも関わらず、ロックミュージシャンの伝記などが人気だという。学生時代の一時期トラディショナルジャズをやっていたという笈入さんだが、そんな幅広い知識があってこそ、あらゆる読者層のニーズを満たすことにつながっていると言えるのではないだろうか。

在職22年。千駄木の小さな書店を舞台に切り盛りし、イベントプロデューサーとしても磨きがかかってきた笈入さん。

最近は新たに別のフィールドでも活躍中だ。文藝春秋からの執筆依頼を受けたり、大学で「書店文化論」の講義もされている。

往来堂書店は店名の通り、老若男女を問わず下町情緒が残る谷根千界隈を散歩しながら、ふらっと立ち寄れる書店だ。本を媒介にしたコミュニティであり、ワンダーランドのような空間がそこにはある。

読書離れが加速していると言われる昨今、本のコンシェルジュとしても魅力的な笈入さんと往来堂書店のこれからに益々目が離せない。

往来堂書店

〒113-0022
文京区千駄木 2-47-11
NICE URBAN 千駄木

■表紙の写真

明治4年に文部省の直轄校として創立された湯島小学校は、東京に現存する一番古い小学校です。

明治の木造校舎から、大正～昭和～平成と校舎が変遷してきた様子を写真でご覧ください。昨年には開校150周年を迎える記念式典が開催され、児童みんなで祝いました。

2021年開校150周年を迎えた

■写真提供：（表紙）文京区立湯島小学校（本文）文京ローボノ支援隊／往来堂書店

■誌名【文京人】に込めた想い

「文京人」と聞いてどのような人を皆さんは思い浮かべますか。文京区にお住まいの方、仕事で通勤をしている方、文京区で活躍されている方…いろんな人が当てはまるのではないでしょうか。

私ども編集部はそういった文京区に関わり「文京区を愛する人」さらにはこれから「文京区を愛してくれる」方々に向けた情報誌で文京区の人と地域をつなげたい、そのような思いを込めて【文京人】という誌名を付けました

―編集後記―

文京区に住むミドルシニアによるミドルシニアのための情報誌第三号をお届けいたします。

文京区にゆかりの深い人物のインタビューでは、現役時代の専門知識を、第二の人生のボランティアに生かす〈プロボノ〉を実践するクリエイティブな生き方を紹介。魅力的な人物のいるお店のコラムでは、地域のお店やお客さんと一緒に面白がって色々工夫することで、とても賑わっている素敵な本屋さんを紹介いたします。

編集部に新メンバーが加入し、誌面のビジュアルも新しくなりました。

今後も地域情報誌として、よりよく面白く発展していけるように努力してまいりますので、ご意見等がございましたら編集部まで、お電話またはメールにてお寄せください。

文京人に広告を掲載しませんか

料金や、規格などについてのお問合せは、文京人編集部まで。

文京区の人と地域をつなぐ情報誌

文京人（ぶんきょうじん）第三号

題字；上村正子

企画編集『文京人』編集部

発行：社会福祉法人武蔵野会リアン文京

発行日：2022年11月30日

お問い合わせ先：社会福祉法人武蔵会

文京福祉センター江戸川橋

電話：03-5940-2901

無断転載禁止